

岩手県立 博物館 だより

Newsletter of the Iwate Prefectural Museum
岩手県立博物館ホームページアドレス
<http://www2.pref.iwate.jp/~hp0910/>

2020.12 No.167

目次／テーマ展 いわての政治物語－幕末・明治・大正－表紙／いわて自然史ノート オオセッカと東日本大震災p.2-3／展覧会案内 テーマ展「いわての政治物語－幕末・明治・大正－」p.4-5／活動レポート いわて文化史展示室（民俗）の展示替え資料／活動レポート 環状列石の調査「洋野町 西平内Ⅰ遺跡」p.6／活動レポート 新型コロナウイルス感染症関係資料の収集・展示／活動レポート 第80回自然観察会「碓石海岸の秋の生き物観察」p.7／インフォメーションp.8



岩手県立博物館 令和二年度 テーマ展

いわての政治物語

－幕末・明治・大正－

2020.12.19(土) → 2021.2.14(日)

奥羽越列藩同盟旗はなぜ五芒星^{ごぼうせい}なのでしょうか。その答えを記した記録は存在せず、宮坂考古館に白地に紺、紺地に白の五芒星の二旗が残っているだけです。五芒星の印は一筆書きに描ける印として古今東西さまざまな場面に登場します。その意味は「魔除け・守護」、そして「つながり」一。テーマ展「いわての政治物語－幕末・明治・大正－」では、岩手にかかわる「三閉伊一揆」「戊辰戦争」「自由民権運動」「原敬内閣」を追うことで、先人たちが涵養し、つないできた岩手の政治的土壌を紹介します。

■いわて自然史ノート

オオセッカと東日本大震災

専門学芸調査員 高橋 雅雄（生物部門）

■幻の鳥 オオセッカ

オオセッカという小鳥の名を、一度でも聞いたことはあるでしょうか。野鳥観察が好きな愛鳥家の間でも知名度はとて低く、一般の方々は聞いたことがほとんど無いかと思えます。この小鳥は、ヨーロッパから東アジアまでのユーラシア大陸北部に広く分布するセンニュウ（仙入）と呼ばれる小鳥の仲間で、彼らは草むらや藪に潜り込んで暮らしています。その中で、オオセッカは日本と中国の数ヶ所だけに生息する、世界的にとても珍しい種類です。

まずはオオセッカのお姿をご覧ください（写真1）。体長13cm、体重13gでとても小さく、体長14cmで体重21-24gのスズメと比べると、かなり痩せた体型をしています。全身が暗い茶色で華やかさは全くありませんが、小鳥らしいカワイイ顔をしていることと、背中に黒い斑点模様がいくつかあることが、彼らのチャームポイントです。尾は扇形で少し長めで、翼は丸く短く、長距離飛行や高速飛行には向いていません。珍しいことに、翼には痕跡程度の小さな爪が生えていません（直に触ってみないと分かりませんが）。



写真1 繁殖期の成鳥のオオセッカ

彼らは、ヨシ（アシ）やイネ科などの草が生い茂り、地面が少し湿った「湿性草原」に生息します。特に、ほどほどの背丈のヨシの間にイネ科・スゲ類・イグサ類などの下草がみっちり生えた「中層ヨシ環境」を好み、その下草の中で暮らし、繁殖期には下草の中に巣を作って子育てをします。餌は小さな昆虫類やクモ類で、特に地上徘徊性のコモリグモ類をよく食べています。これらの行動は下草の中でなされているので、私たちは彼らの生活をほとんど見ることはできません。けれども、囀り行動をする成鳥のオオセッカだけは容易に見ることができます。繁殖期（5月～9月）に、彼らは草原内に1ha以下の小さな縄張りを構え、早朝から夕方まで囀り続け、他のオオセッカを排除し、配偶相手となるメスを呼び込みます。その時期には、オオセッカは下草の中から出てきて「ビジョビジョビジョ」と大声で鳴き、上空へ数m飛び出て鳴く「囀り飛翔」も頻繁にします。その姿や声はとても目立ち、少し遠くからでも確実に見つけることができます。

このようなオオセッカですが、日本にはたった3,000羽しか居ません。3,000羽というと「意外と多いじゃないか」と思われる方もいるかもしれませんが、寿命の短い小鳥としては極めて深刻な少なさで、まさに絶滅寸前です。そのため、国の絶滅危惧種リスト（レッドリスト）の絶滅危惧IB類、および「種の保存法」の「国内希少野生動植物種」に指定され、国を挙げた保全が図られています。

■生息分布と渡り

日本で彼らが生息するのは本州だけで、しかもかなり限られた生息分布をしています。繁殖地は東北地方北部（青森県・秋田県）と関東地方北部（茨城県・栃木県・

千葉県）の数ヶ所の湿性草原だけで、中でも青森県の仏沼（三沢市）と岩木川河口部河川敷（五所川原市・中泊町）、茨城県と千葉県の境に位置する利根川下流域河川敷（茨城県神栖市・千葉県東庄町）に日本のオオセッカの大部分が集結します。特に仏沼は日本のオオセッカの半数以上が集まる、日本最大の繁殖地です。

一方で、非繁殖期の生息地は未だよく分かっていません。少なくとも東北地方南部から近畿地方にかけての太平洋沿岸と、中国地方の沿岸部で越冬しているようです。最北の越冬地は岩手県釜石市の鶴住居地区（写真2）で、確実な最南の越冬地は岡山県岡山市の倉敷川河口です。また、春の渡り期（3月・4月）や秋の渡り期（10月・11月）は繁殖地と越冬地の間を移動しており、青森県仏沼で繁殖するオオセッカは、三陸沿岸、仙台平野、福島県浜通りを経由して関東地方に入り、今のところ千葉県房総半島まで移動していることが分かっています。

■東日本大震災の影響

2011年3月の東日本大震災では、北日本や東日本の太平洋沿岸に津波が押し寄せ、特に東北地方は大きな被害を受けました。これは私たち人間に限ったことではなく、その地で暮らす野生生物たちも同様の大きな被害を受けました。あの津波は、人々の生命や生活を奪い、さらに野生生物の個体群や生息環境をも破壊していきました。

鳥類の中では、特に絶滅危惧種3種について、被災の影響が心配されました。1つは三陸沿岸の日出島と三貫島のみで繁殖するクロコシジロウミツバメ（絶滅危惧IA類）、もう1つは海岸や埋立地の砂礫地で繁殖するコアジサシ（絶滅危惧II類）、そして太平洋沿岸の湿性草原を利

用するオオセッカです。オオセッカについては、太平洋沿岸の繁殖地である仏沼は津波の直接被害を免れましたが、越冬地や渡り中継地であった岩手・宮城・福島の各県の沿岸域の湿性草原は直接の被害を受け、大きく損傷したはずでした。

そのため、2通りの影響が予想されました。予想Aは、被災地に滞在していたオオセッカが津波に遭って死亡したというシナリオです。そうならば、震災直後に繁殖地へ帰ってくるオオセッカが著しく少なくなるはずでした。他方の予想Bは、被災地の湿性草原が失われたために越冬や渡りに長期的な支障が出ることでした。そうならば、震災後数年間にわたって生息個体数が減少し続けるはずでした。これらが実際に起きたかを検証するために、下記2つの調査が実施されました。

■繁殖地での個体数調査

被災地を利用していたオオセッカは、仏沼を中心とした青森県東部で繁殖していた集団です。彼らは、北は下北半島最北端の大間崎から、南は岩手県との県境までの広範囲に、いくつかの繁殖地を持っています。その全てを対象とした成鳥オオセッカの個体数カウントが、仏沼のオオセッカの保全活動を行っている「NPO法人おおせっからんど」によって2008年から実施されています。毎年6月下旬に全国から60名を超える調査参加者が集まり、繁殖地を隈なく歩き回って囀るオオセッカを1羽1羽記録し、その年の繁殖地ごとの生息個体数を算出します。

その結果、震災直後の2011年が過去最多で、その後2018年まで平均7%の割合で減少を続け、2019年からようやく増加に転じ始めたことが分かりました。すなわち、予想Bの長期的な減少が実際に起きていたのです。

■被災地での生息調査

では、渡り中継地や越冬地の震災被害はどの程度だったのでしょうか。また、オオセッカはそれらを変わずに利用できたでしょうか。サントリー世界愛鳥基金の支援を受けて、「NPO法人おおせっからんど」により、岩手県4ヶ所と宮城県9ヶ所の湿性草原を対象とした震災被害の程度とオオセッカの生息数に関する現地調査が、2011年12月に実施されました（当時は博士課程院生だった私も参加しました）。その結果、①沿岸域の湿性草原はいずれも津波やその後の復興工事で大きく改変され、一部は湿性草原そのものが完全に消失していること、②岩手県1ヶ所と宮城県5ヶ所でオオセッカが越冬していること、が明らかになりました。良好なオオセッカの越冬地、特に釜石市鶴住居の湿性草原（写真2）が完全に消失していたことは大きな衝撃でした。けれども、オオセッカは残った湿性草原でたくましく越冬しており、その姿に希望を感じました。



写真2 震災前（2009年）の釜石市鶴住居の湿性草原

■野生生物の震災復興

2020年9月、釜石市鶴住居のオオセッカ越冬地を久しぶりに再訪しました。鶴住居川の南側には鶴住居復興スタジアムがそびえ立ち、大きな歓声が聞こえます。河原にはヨシ原がいくらか回復して、オオセッカが利用してくれそうな様子です。一方で、川の北側は難しい状況でした。震災前にはここに良好な湿性草原が広がっていたのですが、震災後は土木工事が全面的に行われ、今でも大部分が更地のままになっています。湿性草原の回復は、当分は望めないでしょう。

東日本大震災からの復興は、未だ道半ばです。それは私たち人間だけではなく、野生生物たちも同様です。ただし、復興に対する考え方や求めるものは、私たちと彼らとで多少異なります。野生生物も同じ被災者であったこと、そして私たちが進める復興によっても負の影響を被っていることを、皆さんにご理解いただけたら幸いです。

■展覧会案内

テーマ展 「いわての政治物語—幕末・明治・大正—」

会期：令和2年12月19日（土）～令和3年2月14日（日） 会場：特別展示室

■内閣総理大臣を輩出する岩手

「内閣総理大臣を輩出した都道府県ランキング」で岩手県が第3位なのを御存じでしょうか。

ランキングをみると、第1位が東京都で11人。さすが首都といったところでしょうか。第2位は山口県で8人。前内閣総理大臣の安倍晋三氏もそうでした。多い理由は、戊辰戦争における官軍の中核藩（長州藩）であり、その後、明治・大正まで続く藩閥政治ゆえであるといえます。そして、岩手県は第3位で4人です。では、岩手県はなぜ…ということになります。地理的・経済的に日本の中心に位置するわけでもなく、戊辰戦争では薩長ら官軍に降伏して賊軍と言われました。ちなみに明治維新から150年の間、岩手県以外で東北から内閣総理大臣は輩出されてきませんでした。最近、秋田県出身の菅義偉氏になるまでは。

このことは、岩手に高い政治的土壌が存在した証左であるともいえます。その土壌を涵養してきた先人たちを追うために、令和2年度のテーマ展「いわての政治物語—幕末・明治・大正—」では、三閉伊一揆・戊辰戦争・自由民権運動・原敬内閣を一つの物語として紹介します。

■三閉伊一揆—民主の芽生え

盛岡藩領で、江戸時代から明治2年（1869）までに起った百姓一揆は133件（うち、支藩である八戸藩17件）にのぼるとされ、全国最多です。隣の仙台藩が31件であるのを考えると、発生数の異常さが分かります。

その中でも、規模、内容共に特筆すべきなのが、弘化4年（1847）および嘉永6年（1853）に起きた三閉伊一揆です。度重なる飢饉とそれに対する盛岡藩の無策、さらに藩主南部利済の奢侈と重税によって盛岡藩領の百姓（村に住み、

農業・漁業・林業などに携わる人々）は困窮を極め、社会変革要求が高まりました。当時、一揆が成功しても、後に約束が反故にされ、指導者は処刑されました。そのため、三閉伊一揆では盛岡藩領から1万6千人が藩境を越え、仙台藩を仲介役として交渉し、責任者を処罰しないなど、要求の大半を承認させることに成功します。要求は、政治的3ヶ条と具体的な49ヶ条を掲げましたが、その中には「藩主の交替、領地・領民の変更」が含まれていました。一揆の指導者弥五兵衛が「百姓は天下の民」と説き、命助が「御公義様の御陣に相成り、書事安樂に御凌ぎならべし（徳川家の領地の民となり、安心して暮らせるように）」と書き残しているように、そこには藩政への明確な否定があり、藩の元締めである幕府にまでその責任を問いかけるものでした。

三閉伊一揆の指導者たちは1万6千余人を動かす統率力、明確な政治構想および大藩と交渉する教養を持っていました。そして、三閉伊一揆は、日本近世に発生した最大の一揆であるだけでなく、高い政治性、巧みな組織戦術、「民」側からの社会制度変革の自覚など、その後の自由民権運動につながる民主の芽生えといえます。



▲小〇旗
▲一揆の像
(田野畑村民俗資料館)

■戊辰戦争—公議をめぐる政見の違い

盛岡藩は、他の奥羽諸藩と同様に、新政府の命令に従うか、奥羽越列藩同盟と足並みを揃えるかで藩内は対立しました。



▲奥羽越列藩同盟旗
(宮坂考古館)

▼神明堂辺の戦闘 田中北嶺
「スケッチ集」(田中真史氏)

両者は「勤王（倒幕）派」「同盟（佐幕）派」などと呼ばれますが、柘内元吉の回顧録^{註1}や遠藤進之助氏の指摘^{註2}などをみると、どちらも「勤王」であったことがわかります。両者の違いは、後に原敬が戊辰戦争殉難者五十年祭の祭文に「国民誰か朝廷に弓を引く者あらんや、戊辰戦役は政見の異同のみ」と指摘したとおりでした。

「政見の異同」とは何を指しているのでしょうか。それは、「公議」の在り方をめぐる考え方だといえます。新政府側は天皇を頂点とする国内体制を確立するまでは薩長など特定の藩が主導し決定する政体をとろうとしたのに対し、同盟側は勤王を志向ながらも特定の藩による寡頭を認めず、全ての藩が参加する「公議」の仕方を模索していました。

黒船の来航による国難を解決する方法として取り上げられるようになった「公議」は、戊辰戦争においても重要な政見の要素となり、明治政府が五箇条の御誓文で謳った「公議」の約束を果たそうとしないとの疑いが自由民権運動の国会開設請願へとつながっていきます。

また、戊辰戦争後に新しい時代への厳しい船出となった東北の人々にとって、「白河以北一山百文」という蔑視の意識化が、「藩閥政治打倒」への強い動機付けになったことも見逃せません。自由民権運動の雑誌に「白河以北～」の文言が散見され、原敬が自らの号を「一山（逸山）」

としたことがそのことを物語っています。

■自由民権運動—東北党結成の夢

明治から大正期に原敬が政党内閣を確立させるまで、中央政府を牛耳っていたのは藩閥でした。「維新」の掛け声のもと幕藩体制を崩壊させた薩長が、同藩出身者で要職を独占したことは、新政府に社会変革を期待した人々の不満を増長させ、自由民権運動を引き起こします。



▲東北の有志粥を開く圖
「東北新報」明治14年（一関市博物館）
※「粥」は「国会」「集会」の隠語

自由民権運動は明治7年（1874）1月、板垣退助らによる民撰議院設立建白書提出を契機に、国会開設と憲法制定、地租軽減と不平等条約の改正、地方自治の確立を要求する運動として全国に拡大しました。その中で、東北の自由民権家たちは、早い段階から東北での団結を念頭に置き、東北の名を結社名・会議名に冠して積極的に活動していました。それは、戊辰戦争後に政治的・社会的に苦境に立たされている「東北人」の心を奮い立たせる必要性を痛感していたからでした。

こうした動きの端緒といえるのが、明治11年（1878）末の「東北有志会」であり、明治13年（1880）2月には東北六県による「東北連合会」を立ち上げます。また、同年11月に開かれた国会期成同盟第2回大会出席のため上京した東北各県の民権家たちは会合を行ない、東北有志会の趣旨と仮規則を決議し、4ヵ月後に「東北七州自由党」を結成します。東北から自由民権運動を牽引し、主体的な役割を果たすのだという意志表明でした。

これは中央に自由党ができる7ヵ月前のことであり、自由を掲げる全国初の政党です。

また、国会期成同盟本部報（明治14年6月21日、八ノ第六報）をみると、「盛岡組合各郡へ遊説ヲ派出ス、（中略）聴衆頗ル多ク毎会少クモ千七百ニ下ラズ、且熱心二聞クモノ多ク」とあり、岩手の人々の政治に対する関心の高さに自由党員は驚いています。そして、岩手の自由民権運動の中心であった求我社を「東北自由主義の重鎮」と讃えました。

■原敬内閣—宝積の精神とは

原敬が郵便報知新聞記者だったときの「勤王ノ説」という社説が、「薩長に対する憎悪」の例証だという意見もあります。この社説が書かれた年は、官有地払い下げ問題から「明治十四年の政変」が起きた年でした。そのため、問題を引き起こした藩閥政治への批判が込められているのは間違いありませんが、その鋭い批判の矛先はそれに留まらず、自由民権家たちにも向けられ、強いては、「勤王」という主張を掲げれば、「正義」だと勘違いしている全ての人々への痛烈な風刺のように読めます。ここに、原のメディア人としての冷徹な視線を感じます。



▲宝積の石碑
(原敬記念館)

▲原敬/内閣総理大臣就任時
(原敬記念館)

政治家に転身した後も、原はメディア側からの視点を持ち続けたように思えます。新聞記者である馬場恒吾の回顧^{註3}によると、原は直接新聞記者を呼び、議論することもしばしばあったそうです。また、初めて会ったときに原が「総理大

臣になるのに誰の世話にもならん。自分自身の力でなったのだ」と言い切ったことを挙げ、「兎に角かれは他人のお情けや、行為をあてにして政権を取らうとしないといふことを明かにしていた。政権を取るだけの力を養って而して後に政権を取る。併し政権を取った以上は、誰に憚る所なく、誰に遠慮気兼ねをすることなく、自分の信ずる所を政治の上に実現して行くと、これがかれの方針であった」と述べています。

原敬は「宝積」を座右の銘としました。意味は「人に尽くして見返りを求めず。人を守りて己を守らず」です。「宝積」の精神に基づいた原の言動には、メディアや後世からどのような評価を受けようとも、自分が正しい在り方でいけば恥じることがないとする信念が通っています。

原敬内閣の業績は数多いですが、鉄道敷設や港湾整備を通しての地方経済発展、男女の平等な教育環境の充実といった教育改革、選挙法の改正、国際協調外交の推進など今につながる政策でした。

■政治に参加すること

政治というと「難しいから苦手」と敬遠されがちですが、自分の生活をどうすればよりよくできるか、どうすれば幸福になれるかを考えることが、すでに政治に関心を持っているということではないでしょうか。そこから選挙で投票するなど具体的な行動に一步踏み出そうか躊躇するとき、先人たちが創ってきてくれた道筋が背中を押してくれるように思うのです。

(専門学芸調査員 武田 麻紀子)

註1)「元吉翁談話筆記書」鈴木彦次郎、『新岩手人第11巻』、1941年

註2)「戊辰東北戦争の分析」遠藤進之助、1983年

註3)「いろゝの総理大臣」馬場恒吾、『文藝春秋 四月特別号』1935年

■活動レポート

いわて文化史展示室（民俗）の展示替え資料 ～無病息災・病氣平癒・疫病退散を願う～

本館2Fの「いわて文化史展示室（民俗）コーナー」では、照明や紫外線による資料の退色を抑えるため、照度と展示期間に制限を設け、定期的に資料の展示替えを行っています。

4月からは、名人と称された秋田県湯沢市のこけし工人・小椋久太郎関連資料を出展しました。この資料は岩手の漆芸家・古関六平が所蔵していたものです。この展示を通じて、親戚関係にあった両者とその家族の交流を紹介しました。こけしは子どもの無病息災と健やかな成長を願う縁起物であり東北の郷土玩具として親しまれています。

5月からは不動明王掛図を出展しました。不動明王は山伏たちが崇拝した荒々しい厄払いの神として有名です。この展

示には多くのかたに昨今の感染症による不安を振り払うような強い気持ちを持ってほしいとの願いを込めました。

7月末からは、「疫病退散を願う」と題し、牛頭天王の掛図と御札、鐘馗図を出展しました。牛頭天王は疫病を操る神として知られ、疫病をもたらすことも、退けることもでき、梅雨明けに行われる祇園祭や天王祭の祭神でもあります。一方、鐘馗は鬼を退ける力をもつことから、厄除けや家の守り神として飾られます。鐘馗図は、江戸末期に活躍した三陸の絵師・佐々木藍田の筆によるものと、大正期の東京美術学校（現東京芸大）講師・井上利正の筆によるもの（個人蔵）です。

7月末に岩手県でも新型コロナウイルス感染者が確認されました。展示はその

状況の好転、すなわち疫病退散と感染者の病氣平癒の願いを込めて実施しました。

当コーナーでは引き続き定期的な展示替えを行ってまいります。ご来館の際は是非いわて文化史展示室にも足をお運びくださいますようお願い申し上げます。



疫病退散を願う
牛頭天王と鐘馗の展示

（専門学芸員 米田 寛）

■活動レポート

新型コロナウイルス感染症関係資料の収集・展示

新型コロナウイルス感染症は、現在の世代がこれまでに経験した中で最大規模の世界的パンデミック（感染爆発）となり、日本においても既に社会のいたるところに影響を及ぼしています。

当館では、いずれ歴史的な事象として取り扱われるであろう、この出来事に関する資料を積極的に収集することとしました。これは決してコロナ禍を「終わった」ものとして扱うということではなく、発生以降現在に至るまで連綿と続いている、未知のウイルスに抗する人々の悪戦苦闘の歩みをできるだけ幅広く、そのままの形で保存し、次の世代へと託していきたいという思いによるものです。

収集の対象となるものは、新型コロナウイルス感染症について取り扱った新聞

や書籍等、各事業所や施設等で作成した文書やチラシ、張り紙（手書きのものも含みます）、感染対策用品、アマビエ関連商品など、およそ新型コロナ感染症に関連するもの全てです。（食品や使用済の使い捨てマスク等、収蔵・展示環境に影響を及ぼすものを除きます。）

また、実物のみならず写真（画像データ）についてもあわせて募集しています。皆がマスクをつけて行っている行事や、人影のない行楽地など、コロナ禍を象徴するような光景はもちろんです。皆さんの日常的なマスク姿なども、やがては次の世代にコロナ禍を伝える「語り部」になりうるはず。ただし写真資料に写っている方の同意が得られているものに限り寄贈をお受けしています。

このような資料収集活動を周知するという目的も兼ねて、10月から新型コロナウイルス感染症に関するトピック展示も開始しました。皆さまからお寄せいただいた資料についても、順次このトピック展示の中でご紹介していく予定です。

ご寄贈に関するご相談等につきましては、当館歴史部門までお気軽にお問合せください。（専門学芸員 目時和哉）



トピック展の展示風景

■活動レポート

ストーンサークル にしひらな いち
環状列石の調査「洋野町 西平内 I 遺跡」

西平内 I 遺跡は、青森県との県境にほど近い洋野町平内地区にある縄文時代後期の遺跡です。平成26年・27年に2カ年にわたる本調査、その後28年には、洋野町教育委員会による追加調査が行われ、大小の石が直径30mほどの環状に巡る、いわゆるストーンサークルが存在することがわかりました。本調査の際には、その周辺に墓とも思われる集石や、建物跡の柱穴なども確認されています。



見つかった石の集合体（集石）

当館考古部門では、県事業「岩手における環状列石関連遺跡調査」の一環として、昨年度から当該遺跡の発掘調査を5ヵ年計画で進めています。地元洋野町教育委員会と合同で実施しているこの調査は、今年で2回目を迎えました。

今回は、洋野町がストーンサークル周辺の状況を、当館は遺跡南側の集石の様子を明らかにすべく、9月の中旬から着手しました。9日間の短い期間ではありましたが、地中のボーリング調査で石の反応があった地点を掘り下げたところ、左の写真のような集石が現れました。

一方、洋野町の調査区では現代の炭窯の下から、死者の埋葬施設とも言われる掘立柱建物の柱の痕跡が7つ確認されました。他県での調査成果から、この建物



確認された柱穴（丸く黒い部分）

跡の構造は、長方形をなす4本柱か亀甲形の6本柱の事例が多いのですが、今回見つかった柱穴の配置は、いずれにもあたらぬ状況でした。

当館の調査区で確認された集石の内容は、次年度以降に明らかにしたいと思いますが、今年の状況からは環状列石を構成するものではないように感じます。単独で存在した往時の有力者のお墓だったのかもしれませんが。

（学芸第三課長 濱田 宏）

■活動レポート

第80回自然観察会「碁石海岸の秋の生き物観察」

実施日：令和2年9月20日（日） 場所：大船渡市末崎町碁石海岸

今年度2回目の自然観察会は、大船渡市立博物館と合同で、同館近くの碁石海岸で開催し、当館生物部門の学芸員3名が講師を務めました。スタッフの数が多いため定員を増やすことができ、参加者は31名となりました。

最大の課題は、新型コロナウイルス感染症防止のため、参加者の密集・密接をいかにして避けるかということでした。今回は時間を短縮した上、全員に検温とマスク着用をお願いし、さらに参加者とスタッフを2つの班に分けました。コースは大船渡市立博物館から大浜までとし、行きと帰りで講師が班を交代することにより、多様な生き物を観察できるようにしました。

碁石海岸の遊歩道は海沿いの崖の上に

あり、松林の中を歩いて大浜へゆるやかに下っています。そのため、観察したのは海岸性というより明るい林に生息する生き物が中心となりました。

ちょうど秋の花が盛りで、ノハラアザミやシラヤマギク、ネコハギやヤマハギ、イブキボウフウなどが多く咲いていました。また、アオツツラフジはきれいな青い実をつけていました。

昆虫は、秋に羽化したキタキチョウやキアゲハが見られました。クモは、大きな網を張るジョロウグモや、ヤマトゴミグモが多く見られました。また、腹部の緑色が鮮やかなワキグロサツマノミダマシや、オレンジ色をした大きなイシサワオニグモなどいて、手に乗せて楽しむ子もいました。



大浜では短時間でしたが海辺へ下り、波に洗われて転がる石の音を楽しみました。また高橋学芸員が望遠鏡を用意し、オオセグロカモメやウミネコ、ウミウなどの海鳥も観察しました。

新型コロナウイルスの影響でイベントが少ない中、久しぶりに多くの方と一緒に自然観察を楽しんだ日でした。

（主任専門学芸員 鈴木まほろ）



新型コロナウイルス感染防止への対応について

新型コロナウイルスへの対応のため、制限を設けながら開館しております。

入館の際にはマスクの着用をお願いしております。また手指の消毒、体調確認や体温測定へのご協力をいただいております。混雑する場合は入館や利用を制限し、状況によって臨時休館となることがあります。来館される皆様には大変ご面倒をおかけいたしますが、ご理解とご協力をお願い申し上げます。

最新の情報につきましては当館ウェブサイト、SNS等でお知らせいたしますので、ご確認いただきますようお願いいたします。

・「体験学習室」は平日のみ利用可能です。「映像室」は利用を制限しています。詳しくはお問い合わせください。

お知らせ

●年末年始の休館について

年末年始は12月28日(月)～1月4日(月)まで休館します。

展覧会

●テーマ展「いわての政治物語－幕末・明治・大正－」

令和2年12月19日(土)～令和3年2月14日(日)会場：2階・特別展示室
優れた政治家を輩出した岩手の政治的土壌を、幕末から大正期にかけて起こった四つの大きな政治的事象を追うことで紹介します。

◆展示解説会

①令和2年12月26日(土) ②令和3年1月16日(土) ③1月30日(土)
各回とも14:30～15:30 会場：特別展示室 当日受付 要入館料

◆県博日曜講座

令和2年12月27日(日) 13:30～15:00 地階・講堂 聴講無料
「いわての政治物語－幕末・明治・大正－」

講師：武田麻紀子(展覧会担当学芸員)

令和3年2月14日(日) 13:30～15:00 地階・講堂 聴講無料
「郵便報知新聞と原敬」

講師：岡安儀之(東北大学大学院文学研究科 専門研究員)

◆「幕末の文書読み」大人向け(要事前申し込み)

1月23日(土) 2月6日(土) 10:30～12:00 定員各10名 詳しくはお問い合わせ下さい

◆「いわての政治 めり絵たいけん!」子ども向けワークショップ(要事前申し込み)

1月11日(月祝) 2月13日(土) 13:30～14:00 定員各10名 詳しくはお問い合わせ下さい

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、展示解説会の定員を15名、日曜講座などの定員を50名と人数制限を設けております。詳しくは当館総務課までお問い合わせ下さい。

県博日曜講座

第2・第4日曜日 13:30～15:00 当日受付 聴講無料

当館学芸員等が岩手の文化や歴史、自然について解説します。

*展覧会関連講座

12月13日「近世以前の岩手の製鉄一築炉技術の進化」

講師：小山内透(当館学芸課長)

*12月27日「いわての政治物語－幕末・明治・大正－」

講師：武田麻紀子(当館学芸員)

1月10日「岩手のトンボ2」 講師：渡辺修二(当館学芸員)

1月24日「高山の生態系とニホンジカ」

講師：鈴木まほろ(当館学芸員)

*2月14日「郵便報知新聞と原敬」

講師：岡安儀之(東北大学大学院文学研究科 専門研究員)

2月28日「岩手のウォール街「中ノ橋通」とお金の話」

講師：菅野誠喜(当館学芸員)

3月14日「南部・岩手の天然染料～藍・紫根・茜を中心に～」

講師：米田 寛(当館学芸員)

3月28日「雑学のススメ」

講師：高橋廣至(当館館長)

冬の写生会

写生会：12月12日(土)～1月11日(月・祝) 幼児～小学生対象

作品展示：1月16日(土)～2月7日(日)

博物館からの景色や展示資料をお絵かきしましょう。(クレヨンや色鉛筆などはご持参下さい)

週末の催し

◆ミュージアムシアター

毎月第1土曜日 13:30～15:00頃 講堂 当日受付 視聴無料

○12月5日 冬休み直前アニメ特集(アニメ/計70分/幼児～小学生向け)

①フランダースの犬(アニメ/35分)②雪渡り(アニメ/23分)

③サンタさんは大いそがし(アニメ/12分)

○2月6日 感動映画(実写/計86分/小学生～一般向け)

①ポコポコ(実写/53分)②愛しいとしの花子さん(実写/33分)

○3月6日 春のアニメ特集(アニメ/計62分/幼児～小学生向け)

①一さつのおくりもの(アニメ/12分)

②ねぎぼうずのあさたろう 巻の四～大笑い一番勝負～(アニメ/25分)

～もちこし天狗党あらわる～(アニメ/25分)

◆チャレンジ!はくぶつかん

毎月第2・第3土曜、日曜、祝日 小学生向け 随時受付

12月12日・13日・19日・20日 テーマ：戦う(たたかう)・競う(きそう)

1月9日・10日・11日・16日・17日 テーマ：変わる(かわる)

2月13日・14日・20日・21日 テーマ：つなぐ

3月13日・14日・20日・21日 テーマ：わ

チャレンジ!マークをさがして はくぶつかんをたんけん!

◆たいけん教室～みんなでためそう～(事前申込み)

毎週日曜日 13:00～14:30 幼児(3歳以上で保護者同伴)・小学生5名程度
さまざまな遊びやものづくり、実験を体験してみましょ。

※全プログラム有料です(材料費代/プログラムごと異なります)。

※要事前申込み。開催日の1週間前の日曜日から電話または博物館で開館時間(9:30～16:30、休館日を除く)に先着順に受け付けます。1度に3名まで予約可能です。予約状況・材料費代はホームページでご確認ください。

12月	6日	松ぼっくりのXmasツリー	1月	10日	木のこまの絵つけ
	13日	まゆで干支づくり(丑)		17日	たこづくり
	20日	かんたん門松		24日	お絵かきはんこ
	27日	まゆで干支づくり(丑)		31日	オリジナル卵をつくろう
2月	7日	化石のレプリカ	3月	14日	まが玉アクセサリー
	14日	おひなさまづくり		21日	天然石のフォトフレーム
	21日	スライムであそぼう		28日	手づくり万華鏡
	28日	土偶づくり			

◆冬のワクワク!ワークショップ(幼児～小学生向け)

令和3年1月9日(土) 詳細は当館HPをご覧ください

写真コンテスト 作品募集中!!

テーマ「私の岩手山」 四季折々の岩手山の姿を写真にして博物館に送って下さい。撮影場所は問いません。

応募形式 単写真(A4判 1人3枚まで応募可 機材・白黒カラー不問)

応募方法 当館HPから応募用紙をダウンロードし、必要事項を記入の上、写真と共に当館総務課宛送付して下さい(持参可)。

応募期間 令和2年6月16日(火)～令和3年2月26日(金) 16:30必着

応募作品は展示の上、優秀作品については表彰します(展示期間・表彰式は未定)

※詳細は当館HPにてご確認ください。

定時解説

当面の間、休止いたします。

利用のご案内

■開館時間 9:30～16:30(入館は16:00まで)

■休館日 月曜日(月曜が休日の場合は開館、翌平日休館)

年末年始(12月28日～1月4日)

■入館料 一般310(140)円・学生140(70)円・高校生以下無料

()内は20名以上の団体割引料金

※岩手子育てパスポート所有者で、パスポートに記載のお子様と一緒に来館された場合は、入館料免除となります。

※学校教育活動で入館する児童生徒の引率者は、申請により入館料免除となります。

※療育手帳、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方、及びその付き添いの方は無料です。

岩手県立博物館だより 第167号 令和2年12月1日発行	編集 岩手県立博物館 〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷34 Tel. (019)661-2831/Fax. (019)665-1214 発行 公益財団法人岩手県文化振興事業団 〒020-0023 盛岡市内丸13-1 Tel. (019)654-2235/Fax. (019)625-3595
------------------------------------	---